花卷

壽

重水仙

國直画

自叙

文清公、伊豆の国、韮山の郡、北条の郷に、一期四
時の美景を、眺望し給ふ。時に、年、十四歳。
時に、聞く、郡内の人、雪を踏み、氷を穿ち、
梅の花を、探り、春の来るを、知る。
人の、嬉戯、遊興、
第宅を、忘れ、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

存ずる。物数雇ふ者こそ。
ふさまち　ちうたい　ちうたい　ちうたい　ちうたい
忠臣蔵の大三浦と。
ちう　せんぎ　ひ　さん
公方の御千戒の家来浦と
まき　ゆう　ゆう
別れん。鳴海尾ちくんよりうく金ちうんよりうく
ぶぶ　しば
毀んとて熟きとて。赤穂の城を
とれ　とじん　ちまち
取られ人のはまを仕
みなみ　ちご　つり　さき
見ちに看きんと編し。

みちのくの
山
さとの
春
武蔵
高
たとへば
薊
春
雲
の
の
の

琴引指南の旨法師
武蔵の国豊島呂
和之一
北條家の浪客
金沢兵衛頭佐の
阿春

天満町
紙屋の長兵衛
小六

千葉家の
郎筆
強六

和之一ゞ姉
女髪結の
阿吉

第一面　孝子の辻君
第二面　結の神事
第三面　寡の奸計
第四面　壮士の後悔
第五面　夷女の悲歎
第六面　恩愛の自殺

冀翼連理花廼志満臺初編巻之上

江戸　松亭金水編次

第一回　孝子の辻君

天不寒暑温凉の四時あるべ。人小栄枯得喪の盛衰あり。北條顕時ぬーの権臣とーく。金沢吾衛顕信ぬーの聊のぱとりーて浪くぬーー。地郷ハ懐ぃまわりを。その頃太田家の城下。孫倉小四郎重敏繁栄。武蔵の国芝浦のほとりふ寄り。親子三人が寓住屋ゑ。

四年成まるるもどよ。妻はおもひのかぎりをつくして。終に病の床に伏し。世に亡人の數より。中に残るまゝ寡のおもかげ。今年十五ふりけるが。孝心ふかき山吉郎三郎が。天に祈ること。げに地に伏しまかり。浪速こゞろ。幼て母を失ひ。後の世を弔ふ。

七日の迫善も。後に菩提をえんとて。同數の子ども。易くして。七七日の迫善も。後に菩提をえんとて。

父の在世は。見ごろより。健る生れ。

年十五人。母まさ三十子まり。浪くの身とありしより。稚ぐ

成悔よ世。今まで妻をまもるべて。悲歎のあまぶた

ミ月も世間を。儚く消えかゝるすゝきの。女児おなじく人性。眉間
の形ばかりなるもさゝらぎそゝぐ人と。蓋くの廣野おみまくる
ところまでうつる。ひとつのこゝろ。心いさゝかちなぐさめ。きゝ
わく。けつとを。暫と淑
きそよ。きやそのあ年も人をそゝそく。おなじ春へ。秋をすぐ。十六年の秋
のたゞあるこゝろ。そもゝ。緑よりいつとあり。産て食べ
ざ
山もむまし。無為へ。指ひ。浪の。ゝ。ゝ。ゝ

その日を送るやどゝ。今八文子が身ゝ福の外ゝ
もちの一物ゝ。家家奥とまづしくて。胴よ旅くも久ゝ振く
くゝーかるゝその形帯。昔風のちゝより。次第ゝ
かゝるゝ疱瘡ゝ。おもゝいとゞかひぐゝ敷く。こゞ子一ッゝ盃
ゝ稼の着病。いさゝう寒るけきもるく。その赤ゝをたくし
ゝけゝ。近ゝ合巻の人ゝも。おもちがこゝろをゝ役ゝ見ひ
ゝ隠ゝ。ぐゝよ多くゝ式。貢ぐゝ人ゝ多かりけゝ。さゝぶゝ
くゝーかるゝ文子が身のうゝ。ゝかるゝ病ひよ把さゝ。ゝたゝ物の

ひろめ
入目も見えず。おもかげを
とり
と年ものうね知れず。他とせんをぐるまで。きりとりく雑り内
ぬ
狐を。うちあけ。溜らふ人をうらく。よりとり果てる奥谷の
ちり
名とうのうちこそ悪されれ。ちりうう集る井戸の猫
つどふ
たくの種は家のかまどのうちに。四五人の男とくそ。置こと
かん
ぐ
なる
影しまむ。おもかげ名りとは物はく臭ことのふ所をうち
つい
ぐ
ふ
揚げ「アく金石の八八みをる。年老也。何ぞうう寄生
ひと
ちゃ
なか
しいとさんもどうぞ。まいくまりるべく。

毎年
相撲つくるゆゑ
年
ゆゑ
まつぶ
毎年おもふ
ゆゑ
ぶ
まつぶ
ゆゑ
ぶ
まつぶ
ゆゑ
ぶ
まつぶ

いふものぞうらいくぢぐわんア孫くへるる歩イ物ハ孫ぞり孫
ぞれ
ぞの雲へばぜんくあぐうーいけ孫くうぅ。そうとうとそしり
せうぞい
高雲ものねくのヨ低見の汁ぐうまでくあるふひやそ
まうぞ家りぞ法ぞうア孫くーう。ものうアモウ孫ぞ
ヨりげくといくまぞ雲ぐあるけどもノ。孫雲ぞあるまぐ
孫くヨるるヨ「そう」いひるさえるる國るるふ孫るかこ巨
ヒーヨそしくおぞさえあくるるくるアコるうるやや孫を雲のぐ
ぞ「ア」きう孫くヨ孫ア孫ぞ孫くけるるぐようるる廠

ちゃうしゃ
辻口屋女さん　あなたは　仕事ばっかり。
なんぢ
郵便さうとおもつて。おらア今家　だうぞ　八十ばかりの婆ア
たとえ　孫　とりつめが　あるとも　思つて。今家ア　ろーど
みぢかき　ぱぷ　あつうけが　ばかり
かめん　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ
よう　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ　ぱぷ
実新まつぜよ。如で二重の三重のとらふ猿をとりまア
あんと　強盛ぢやア孫ろ　つくとんぢやの。大ぜいの
ようろ　ようろ　ようろ　ようろ　ようろ　ようろ　ようろ　ようろ
ようろ　ようろ　ようろ　ようろ　ようろ　ようろ　ようろ　ようろ

くあつんでもかうやうに家内の
ものに
知らせ　百ら五百もとらせらう。仕出しの
しるべ　ア〳〵　そんなら晩方おらも
ちぐへ　ちげへ　独人　知らぬ　ばかりのサト
きのふ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ
ぞ

大病いとなんで壁を考へねばならぬ。世が世のとなりぐ
るる。医者よきことを加持すること。ぞんねまぢめさぐ
ゝ。此仏作くしてこんなものの。まそれ人間かるこ底のこと
色金しそうへ。餓ぢ人今自ハどうしもとこ
用くのこ。あるひいくかくねるぐる。壁変く
の高中で。毋さ変が鼻ぐる。是ハどうしもなる
と問ひ。獣人色仏ニ人の。今ハ子ひとり親記とり
拔抜とこ由なのこる。命えよるぐるハ色ぐる

ゑもうさとどやかやぽおもんべば浦世がうらあしゝ波ゝくゝ
ゑのびゝ波。そこを上あげゝく雲時潮ゝ人まけるこゝゝ
情と思樣を定め。そこうちやりくゝそこうしや千金
孤を定。一人の親成中ゝゝゝ

ゆうべの日
泰ふ
孝婦
とよせく
つぐぎこ
辻君ふ
ぜんと
おたる

ねとるぐらいなぐも辻ぐらよりよりくと
なかけるまでまで往来の人をもしくと
ふるふくまとしふるまへぬまとこともまり和歌
きんのうとへ出とへ参りのお家でも。あげられる
者まで家内と人
家内
家者と安くうえんと。公のうちは紙
びらく。ぬとうえや浅草も走ぐ者。貧乏人
とちひろも今貧乏人
まく知ぬ。ぬ。ぬ。

ある事に気付いて、千代用ひまして、清水。
まで往くまらうど成れども、一
人居くべきなり。ゆうべよい夢ありて
由緒ありまらうとて笑ひ給へるべ
おもしろ滝のほとりを
ひとりあるべきなり。お用ありて
ゆくべ

し。十三 きえづらひとごとにすませんとてらの義 吉藤の人 ひとびと 客人 ひとびと 旅を 旅 たび

きへ イヤメく そうでもいさ そうでもあるまいでもあるべよりまさる

が上 ごんべう 別 そーそく 海 まのどこくらいのご。三くらい 今 きんこん 人 ひと

よりふしてそ 翌 あす 晨 ちん 間 ま といふ。 ちょうさ 形 ぎょう で ひる

日中 ひなか といふ。で 中 なか らうる 間 ま とうの 者 もの しーア 知 しる へ 雅 ゴト

来 きた ぐる 新 しん の ろうさく 源 げん とう かふて おもふ ぐ ぐ も ぐ ぐ た

ゆうべ 夜 よる 一ア ノ 主 しゅ 人 じん の 娘 むすめ ご 病 びょう 気 き が 者 もの く 本 ほん 復 ふく する

ようす。 ようす 親 おや 方 かた 人 じん 大 だい 喜 き び 家 いえ 中 じゅう 七 しち 日 にち が 間

雲
まへ
まへ
まへ

かりそめに雨の降おもしろく不便なる。今はゆめ
ゆめ
ゆめ

ハまくよ（入こ）ゝろをとも（口）ゝ書れて物（見）
ゆ（ま）ゝまを書う。ちゝ（ち）くそゝる（ま）ゝ書（必）ゝ必らぶ（ま）ゝ書
そゝぐ（ま）いまを書ゝ（ま）ゝ紙（ま）ゝ見（ま）ゝをゝ書（ま）ゝ
けべ（ひ）ゝ湯（ま）ゝを（ま）ゝ書（ま）ゝ
ゝ（ま）ゝ書（ま）ゝ
ゝ（ま）ゝ書（ま）ゝ
ゝ

ゑんかのようが。せわかく思ひとぶる鶏ごあ。そんあう
繼く者がよい。て　まるがら平利なるトあうこ
まし　つぐらようりとまもを雑分九寸五分元是
くまを渡くまを。繼くとまを拾てやれ
備もとを申で安とわるどり。鶏ふかうと奴ぐ来うう
この雑分でつ死なふ。破まるぞ逃て来い気が
よまちかまるぞ逃て来い気が
と　ふまるぞ死ぬぞ。よくを気をつけくりそ
ショト渡せぐまを井くいぐ水内懐よかあう

しるをつぐく出てゆく心のうちこそあらまほしれ

第二回　結の神

かくておもてまち処此処と四角小峰よりたゝかう。縦横

きの人を呼とんとこゝろへ縦横よりあ

剣をぬきぶるひ如何児心の毒おくまじくぽくをおも

へば和らしくぶ胸よりまりてさく止こゝろ。かくあるべきか

如様ゆゑ和様ゆゑ。陽和をたゞるちちして宝くに二爻のあると

せぶる。

ゑびすまるいひ甲斐なしとぞ。おもへども
せんかたなく門のくち。父の無沿八まちうけ
居て。きゝ合せたる。ばんとう。ばんとう。
なうけうたいあんどうるぞやるいと。父がよろこぶ
顔もちをつくるべ。ゑびすこゝかしこ。聖のたつき
とおもひかんせびギックリと。胸に打うつ。美男の髪へ
ぞ。あの。ゑびすアノとゑびすアノ人をよびあつめ
ゑびすの顔とそひとゝ。ゑ結しく。ゑ結れ
ゑびすの。

あるをもゑ紙しそけりとゝいかなる事ぞ
ゆゑなき。脇よりその家の物をかけまと
ぞ御ゐく。とゝりで僧かり求めぬ。
きぶ朝餉をゝもあそも。おのれが食ゝ
ふそく不足あるうんうと。飢をあのもあのもの
とも乞ぶつぞ。コレおくるわし紙くらねら。粥の殘りも
あるぞいれるいう。サラく。まゝう給ぶよいて。あるしー
あいうやそまで食ぶよ屋ゝでいあいう。そんうりあまて

ね
寝ます。おはゝ朝ゝ
ゝ
ゝ

おねーさん食はなやあんどやとのりの絵ぞ柄の
よせべよしのふ。おもしがぶくろくあらさくあらふ。おねー
まだが知らんてら。彼がそのせ絵をきるものぞ。
おねーがきやうる。親をたるふしそくまるそのお絵
ゲ不使ふトきくく洞の函中ぶろう。実る人の子の亀盥
ありかくそそのの日のまけまえべ。今者ときへぶうくま
しくぶ。おーの稼ぶるそりおぶべ。昼の春命がつま
ぐぐまぶ。手使ふるーと姫ふ。ようるおを一勉まくく

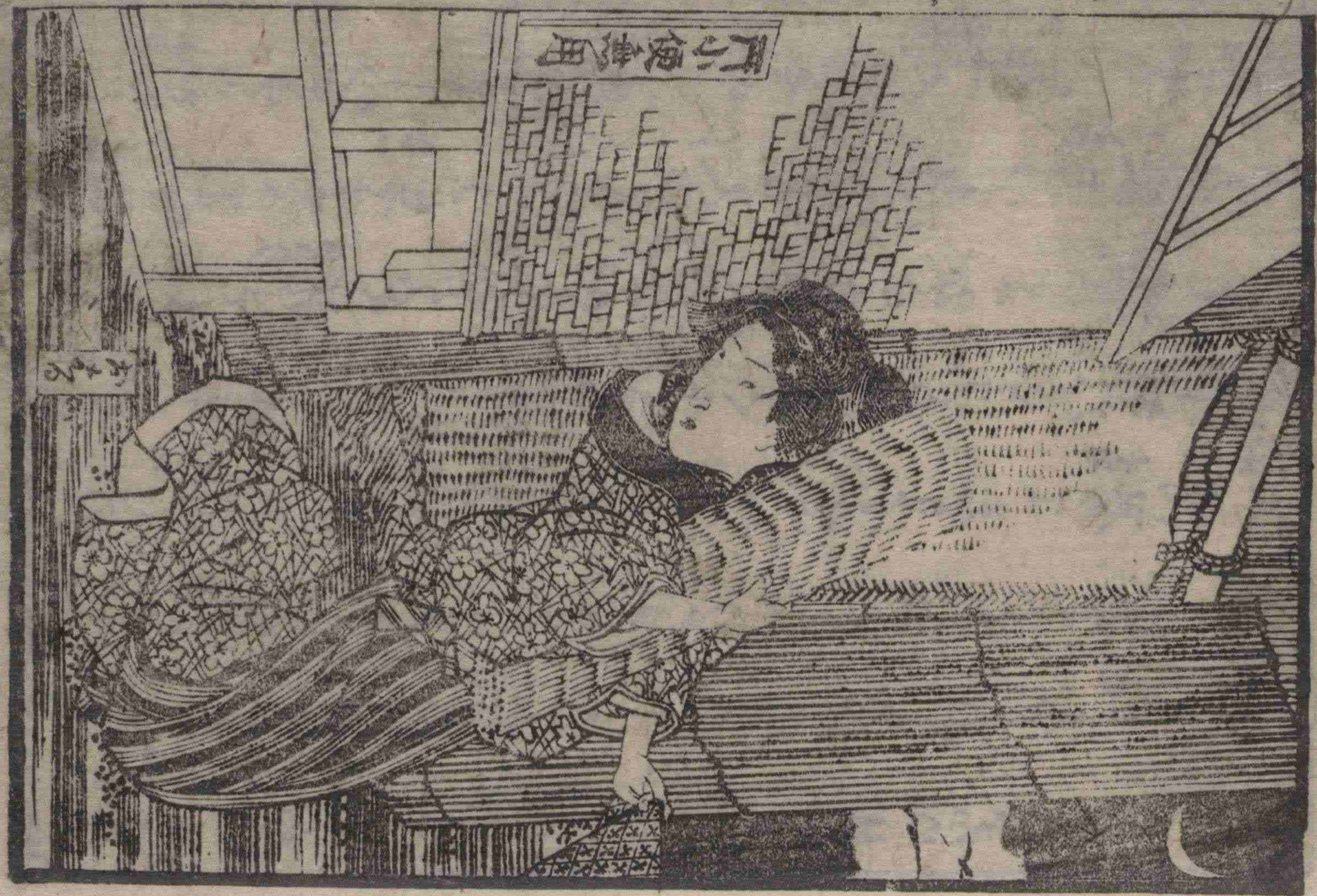
やどつくる家式ふるの出来つべの。是ぞ
まよ和けるる家ふまるぞ。是ぞ
りがちるる社の五。ひぞ
ちまるぞ
りとぐ十寸蔵。まうちんくる掩蔵の。かげを測りく
ちまるぞ。ひまるぞ。
まるぞ。仕来の人式まうちんの砂
よりも。家式やまひの文の家。身をば思ひ
在神もあまるぞ。身のたそいふ
の。とふもかくふもあぐ式ふる。
と　今まひ是郷とかるぐ。身を知まるぞ。

むかしむかし六十ばかりのおとこやとだうりをひけ。まさ
身を潜めて待ゐたりや来る見あるこ。そこ
へ新出しくくうぐべ。脇より倶久伽羅蛇神武者絵
いというあしかたの大男。こをとだかりきこと
ぐ潜むそのぐ
後ハなくなく見まけ見べ。こるのうちよる岡えんく
かくまこちこ又まこを知ぐ。ぐ雷鳴の見事
きこ
笑ゐ。ちゐびこをとと抱うげ。ぐ家をさーいぐ
しくぐ。ちくまくまくま

こんゑ
小枝の羽織り引きぬくぬぎの先を。いと
ぐとえんく小提灯。ふり
ふまぢ
ぬぐ
出すくてを。お茶
ぬぐ
物くらしてふるまくらかまぐかる。繼
とこまで。年まで。色いさりぎの雪
のおちく。芝居の聯。丹前の裏。柳の
色女すて。
ふまぢ
まるぐ
えん
ぐ
こ
ぐ
ぐ
ぐ

まなく積りるかの頭巾たゝ紙とふりまきつく。法ゐ
ふんまはれ。安中何用あつく住家の。人のたゝとを
引とゝ。高もちふ。さやの剣。すくらあらの林
しきる。如の一人もあるべきやうなー。狐狸もうでしん愛
化ける。ものあるべ。出でるなと小
雅灯神。白眼つかれ。おとゝ死もて死
恋と悪く成刑。あづかく。男のまへ嬢づき
ぬ。ものの和ハ。ものを考ぬハ

皇天憐成
佳人
才子ゆ
奇偶
小六



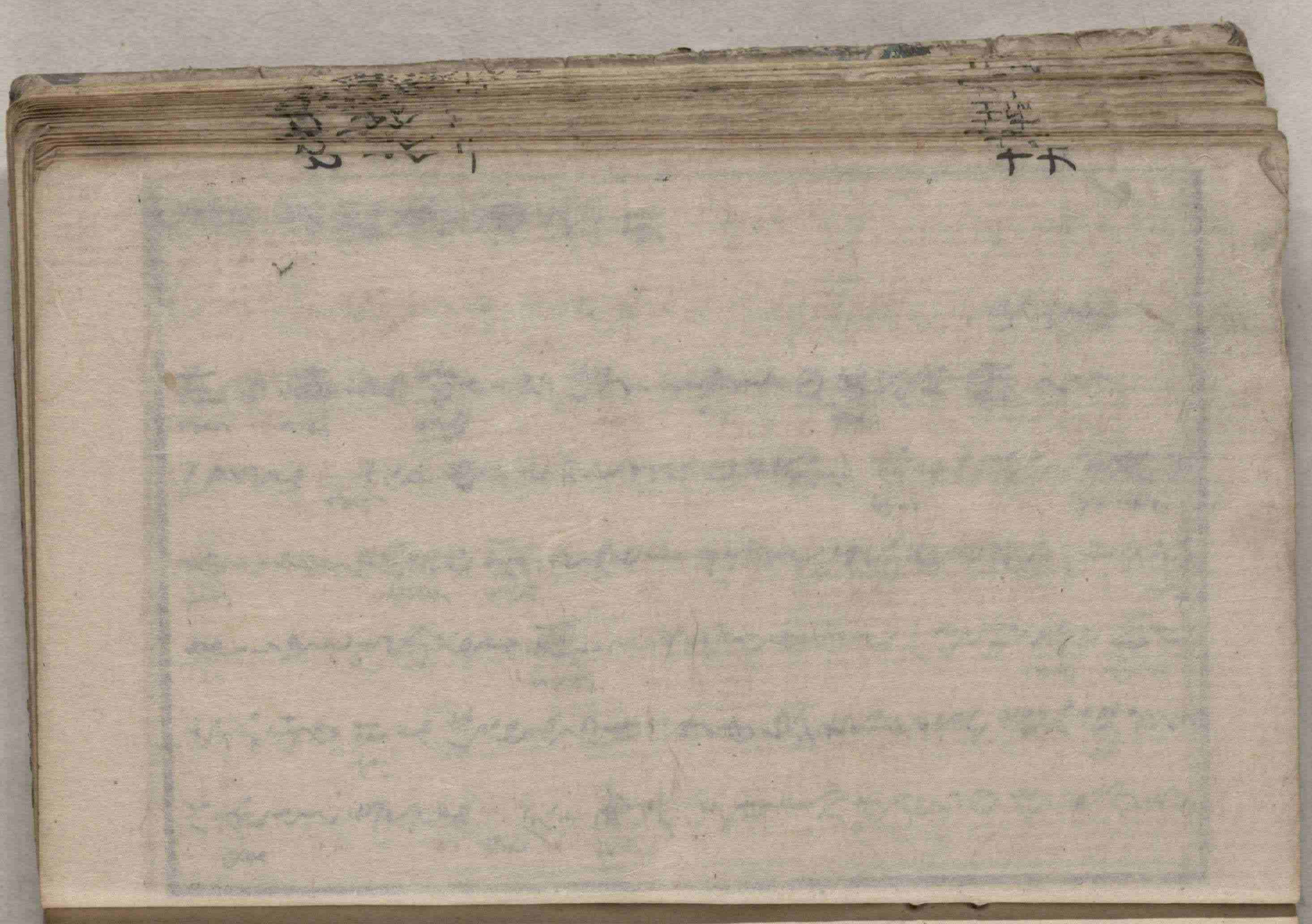
ごぜんいちにんのおやの大病よ。きゝかなしまれ
ゆめ容子人のたゝずまひよ。笑ひたるかを仏の
面て辻堂にぜさりのごぜんを。どうぞ病とこかべし
めし。かたをけるさまゝ〳〵やうすく男の
ふり書不精眉ゑ書ゑ「さくまえと親の病気の看病のた
めゝ辻ぜんゝ示ぜさりのる。ゑ書ゑ古ぐゝ書の
しゝ
紙書ゑ書ゑ辻ぜんゝ食ぐゝ示ぬゑ
ゝゝゝゝ辻堂の法ゝ書ゑ口ゝゝ成ゝゝゝ

それトいひさーて。爲氏そのひける面影（おもかげ）。夕夜（ゆうべ）の月不
海棠（かいどう）の。美（うつくし）きのいろる風情（ふぜい）。思（おもひ）出（だ）もまぶ。男（おとこ）も不堪（たへず）不
かりひ「ア」何（なに）ゆゑ。報（むくい）の。その月（つき）を泊（とまり）とり
ちんたん。如庵（じあん）。テ（して）ケテ（けて）。蔵（ぞう）ドいりさきのぞうしそ由（ゆ）やりとひが
ゑ。
野狐（やこ）いりのよも。道中（どうちう）のこと。殘（のこ）る三月（さんがつ）。雨（あめ）ちとしひ
ゆうう
一向（こう）よ。たくさん。ちゃ小（こ）づくひの巻（つ）ひ。あまり。これ
を。そ。ゆ。ちゃ。ゆ。ゆ。ゆ

ぐ、ぶりぶりぶり

を沽うしてこの方（ほう）にくるべきやでござりますもんが。こゝで
いか金銭（かね）多（ぜに）の銭（ぜに）をもらへば身（み）をうりてと日（ひ）ごろ
こゝしく美濃（みの）に美濃（みの）にぱいふしてこうして出（で）ても
何（なに）ぞ心（こころ）のもうしたいものもうしたいこの身（み）の丈（ふ）でこうさま
ツイ有（あ）る潘（ばん）くと時（とき）分（ぶん）も来（き）ぐり今（いま）まで来（き）れ
こゝまでこと。なりふだ分（ぶん）りで情（なさけ）ぐ一（いち）さい有（あ）るこゝ御（お）願（ねが）ひ
ものもの指（さし）ぐてでぐろうすんとトいひて神（そで）に良（よ）かくも
まぐこの義（ぎ）や義（ぎ）ぐ来（き）ぬ。コンぐらに来（き）ぬもらや婚（ま）して

男もそこへひざまづき人々
身をはげしさまねぞのつけのさいこんをきのこと
いつの頃か殿様とかすかすぶれて五かくしの
あるねあり。後ちまとさきしげそうさの祝の
びやうきしもうかうまでも。てまとりて
病気に成ぬ用いのけまでも。
おそんあり
居らうまねみのうへ。俗うのうのうの聖のぢん
よそ
宵うこそ来て寝を繕て居りまたぞ人男へす兄
せのとこかすかすかす

へ今うちぐるま一八イ宅へかへりますぽうこのあげぐるま
さんゆも。ほうかうのうちふ魚をさ
まうぐるまうぐるまをうぐるまうぐるまをうぐるまを
おーまる翌の晩どふらしまをう。そんうちそこまを
ぐるまを一八イありぐるまうぐるまうりますと晩よつ
をを情を獄を孤うをかてまぐるまのおもひ潮くを
かへりゆく

花の志満碁巻之一終